

特別講演

景観・環境の意味と在り方

Landscape Meaning and What Landscape should be in Terms of Landscape Essence

進士 五十八 東京農業大学農学部教授 Isoya Shinji

梅棹忠夫(1969)の定義をアレンジすると、「環境とは、人間など主体と関連しあう具体的な空間であり、また主体の生活に内容を与えると共に主体を制約し拘束する。その逆に主体は環境の要素に働きかけ、その存在意義を認めると共に、それを変形したり改造したりする。こうした環境から主体へのアクションと、主体から環境へのリアクションの相互作用の過程は無限に運動しつづける。」

このように、我々の周囲に存在する無機能的・有機的、無形的・有形的、非経済的・経済的、非社会的・社会的……あらゆる要素が「環境」であり、その視覚的環境を「景観」と呼ぶことが出来る。景観にも自然・人工・複合景観、都市・田園景観などの切り口があり、形・色・規模とか季節・時間・記憶などの要素がある。

論者は、ランドスケープの専門家として「環境」や「景観」の意味や本来の在り方について考えてみたい。

環境が地球レベルの問題になってから、又、景観が全国レベルで行政課題になってから、かえって表面的な議論に偏っているかに思われる。環境計画学としては、P V E S M (physical・visual・ecological・

social・mental) な質のチェックを経てトータルなバランスがとれてはじめてアメニティ (amenity) 環境といえる。更にランドスケープ (land scape) の本義は、土地・自然性、全体性・総合性にあると考えられるから、「色彩」などを決定したり分析する際も環境質を規定する1要素に過ぎないという謙虚さと、その背後にある自然・歴史・文化・民俗・生活など環境の総合的視点とを重ね合わせた議論が求められると思う。

論者の立場 (造園学 landscape architecture) では「緑」がよく話題になる。緑色 (green) は生長するの意 (ghra) から生命性に通じるが、都市計画的には緑地 (open space) で自然性・空間性に力点がおかれる。植生、森、林、木とか、常緑、落葉とかで多彩な緑イメージが広がる一方、大自然の景観の中での緑の変化や人工物との調和関係などに興味深いものがある。

講演では、論者の体験を踏えて人間にとって本来的に好ましい環境、そこでの景観の在り方、そのためには色彩をどのように考えるか等々思いつくままに申し上げてみたい。

進士 五十八 (しんじ いそや) 東京農業大学教授/農大総合研究所所長 (農博/造園学・環境計画学)

略歴 1944年 京都市に生まれる
1969年 東京農業大学農学部造園学科卒業
1969年 東京農業大学農学部助手
1982年 東京農業大学農学部助教授
1984年 第5回 田村賞 受賞
1986年 農学博士

1987年 東京農業大学農学部教授、現在に至る
1989年 平成元年度 日本造園学会賞 受賞
1993年 東京農業大学総合研究所所長、現在に至る

現在 日本造園学会常務理事、日本都市計画学会理事、日本環境教育学会運営委員。国土庁国土審議会専門委員、環境庁アメニティ自治体表彰選考委員、運輸省港湾・海洋環境懇談会委員。東



進士 五十八

東京農大教授

「白砂青松」といえば、日本の風景の代名詞だ。白い砂浜に青々とした松の木が点々とする。

日本の海岸風景は、だから美しいといふ。

だが、本当だろうか。

確かに、国の特別名勝に指定されている「天の橋立」「松島」「虹の松原」など、いずれも青々とした松原である。しかし、必ずしも白砂ではない。

もちろん、朝鮮通信使の船が瀬戸内を航海しながら眺めた海岸美は、まさしく白砂青松であったろう。中国山地の地質は、花ごころ岩。これが風化するると、白っぽいまな土になる。

対する関東は、火山灰系

地質・植生・地理…すべての総合

の地質である。石も土も黒っぽい。「黒砂青松」でもいいのだろうか。はたして景観とは何か。定義しておこう。

「景観、すなわちランドスケープは、土地(Land)の上に緑り広げられる動植物の生態から気象に至る一切のものの総合をさす。都市景観をタウンスケープというように、スケープ(cape)だけでも、その場の全体像をさす」

定義に従って、景観を解剖してみよう。景観の構造は、地質、地形、植生、水、地理が、下から上に重なってできている。

地質のせいで関西は明るく、関東は暗い。地形は土地のひだである。富士見台、潮見坂と聞くだけでイメージが浮かぶ。植生は緑の風景だ。松林、杉林、笹(ささ)原、桑野。水は河川。谷川、野川――

景観イメージは、こうして決まる。その全体像が地理の違いになって現れる。

朝日新聞日曜版より引用



進士 五十八

東京農大教授

山小屋や営林署の建物の中には、大自然に溶け込むようにと、屋根に緑色のペンキを塗っているところがある。

ところが実際は、周囲から屋根の形だけが浮きあがり、目立ってしまう。

周りの自然が緑だから、屋根も緑色に塗れば調和するはずだ。私たちの頭ではつい、そう考えてしまう。

景観対策といえば、だれでもすぐに「色彩」のことを問題にするのはそのため

だ。しかし、人間の目はまかされない。植物の緑と人工の緑の違いを敏感に見分けてしまう。

人の目には馴れぬ 自然の中の人工色

樹木でも、自然材の部分はしっくりと背景にとけこみ、気にならない。

人間の目は生命を脅かす危険を発見しやすいようにできている。馴(な)れない人工物は注視の目で見、不安のない自然物に対しては、あまり緊張しないといふようにできている、というのが私の仮説である。

私たちは、「緑」という一色で大自然を代表させてしまいが、自然界は実に多種多様な色が溶け合っていてきている。同じ緑でも、文字通り色々ある。そして自然は、どんな色でも包み込んでくれるほどの奥深い許容力を持つ。

ペンキの色は人工的に作った色だから強烈だが、自然の色は、目にも人にもやさしく映るようである。

京都市美対策専門委員会委員、埼玉県・名古屋市・藤沢市・新宿区・足立区の景観審議会委員、神奈川県環境政策懇話会委員、静岡県文化財保護審議会委員、豊島区アメニティ形成審議会会長、川崎市自然環境保全審議会副会長、埼玉県緑の審議会委員、横浜市緑の環境整備審議会委員、大和市建築審査会副会長。朝日森林文化賞委員会委員。東京芸術大学大学院・女子美術大学大学院の非常勤講師。
著書 『アメニティ・デザイナーほんとうの環境づくり』学芸出版社
『ルーラル・ランドスケープ・デザインの手法』学芸出版社
『緑のまちづくり学』学芸出版社

『ランドスケープを創る人たち』プロセス アーキテクチュア
『日本庭園の特質一様式・空間・景観』東京農業大学出版会
『自然環境復元の技術』朝倉書店
『造園を読むーランドスケープの四季』彰国社
『景観行政のすすめ』日本都市センター、ほか多数
※1994.4~1995.3まで朝日新聞(日曜版)で「私の景観論」を連載。